

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第4号 畑作物

発行日 平成21年 6月26日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

小麦：県中南部では収穫適期を迎え、刈取作業が始まっています。子実水分を確認し、適期刈り取りに努めましょう！

また、倒伏圃場や品質に問題があるものは刈り分けし、良質な小麦に混入しないよう注意しましょう。

大豆：中耕は初期除草剤(土壌処理剤)の効果がなくなり、雑草が発生し始めてから行いましょう。

培土は倒伏防止や、根系への酸素供給などに効果があります。収穫時に土を噛み込まないように培土の高さは一定になるよう作業を行いましょう。

1 小麦

(1) 概況

県中南部では収穫作業が始まっています。7月上旬には県北部での収穫作業が始まるものと見込まれます。

(2) 収穫作業のまえに

適期をのがさず作業を行うには事前の準備が大切です。

ア コンバインや乾燥機などの点検整備や清掃を事前に行う。

イ カントリーエレベータや共同乾燥施設を利用して乾燥調製を行う場合は、受け入れ時間や荷受け水分を前もって確認する。

ウ 品質低下を防ぐために、事前に倒伏圃場や赤かび病の発生状況を確認し、どの順番で刈り取りを行うかチェックしておく。

(3) 収穫作業の注意点

ア 成熟期になったら、子実水分を確認し、概ね30%以下になったら速やかに刈り取りを行う。

イ 曇りや雨の日は子実水分の低下が滞るが、晴天には1日に2~2.5%程度低下する。

ウ 普通型コンバインでは35%前後から収穫ができる。

高水分小麦の収穫について

最近では自脱型コンバインの性能が良くなり、水分の高い小麦を収穫できるものもあります。しかし水分が高いと、収穫時に粒がつぶれたり、乾燥時に退色粒が発生したりする危険性があります。やむを得ず高水分での収穫を行う場合には、作業速度や回転数を抑え、丁寧な作業を行い、刈り取り後はできるだけ早く(1時間以内)乾燥作業に入りましょう。

(4) 乾燥について

収穫された麦をそのまま長時間放置すると、変質し異臭麦や熱損粒が発生します。刈り取り後はできるだけ早く乾燥機へ搬入しましょう。

乾燥機的能力にあわせて収穫作業をすすめ、速やかに乾燥を行いましょう。

- ア 送風温度は子実水分が高いほど低く設定する。子実水分35～30%で送風温度40以下、子実水分30%以下で送風温度45以下とする。
- イ 高温で急激に乾燥すると、熱損傷や退色粒が発生する可能性がある。
- ウ 水分が高いほどテンパリング時間は短く設定する。(子実水分30%前後では1時間以内)
- エ 乾燥機への張り込みは循環型乾燥機では容量の7割程度、平型では堆積の高さを20cm程度に抑える。
- オ ビンやサイロに一時貯留する際は、水分が17～18%程度になるまで1次乾燥してから貯留する。3～4日以内には仕上げ乾燥を行う。仕上がり目標は12.5%以下とする。

2 大豆

(1) 概況

今年大豆の播種作業は、順調に行われました。県北部では低温の影響で生育が遅れ気味ですが、県中南部では、出芽揃いも良く順調な生育を示しています。

(2) 中耕・培土

中耕培土には次のような効果があります。

- ア 雑草防除
- イ 倒伏防止
- ウ 土壌の通気性を良好にし地温を上昇させ根の機能を向上させる
- エ 発根を促進し、根群を発達させる
- オ 土壌の排水を良好にする

- ・ 中耕培土は、大豆の3葉期に実施することが一般的ですが、初期除草剤(土壌処理剤)の効果がなくなり、雑草が発生し始めたら早めに行いましょう。
- ・ 培土は収穫時に土を噛み込まないように高さを揃え、根本まで土がかかるように行いましょう。

(3) 大豆バサグラン液剤

「大豆バサグラン液剤」は、大豆生育期に処理できる広葉雑草対象の除草剤ですが、利用の際にはいくつか留意する点があります。

- ・ 大豆の品種によっては薬害を大きく受ける場合があります。
- ・ 広葉雑草の光合成を阻害する作用を持っています。晴天が続くときに散布することで、効果的に使用することができます。
- ・ 水稲用のバサグラン液剤は使用できません。必ず大豆バサグラン液剤を使用してください。
- ・ アカザ科、ヒユ科、トウダイグサ科には効果が劣るので、これら雑草の優先する圃場では使用を避けます。
- ・ 剤の特性をよく理解し、適正に使用してください。

次号は7月30日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

**6月1日～7月31日は
農薬危被害防止運動期間です**

近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
農薬の保管・管理は適切にしましょう